

『第二章』について 五

昭和五十六年九月十二日

盛岡市・中央公民館 盛岡市・中央公民館

一、「ただ念仏」と言えるところに

機の深信がある

蓮如上人は「ただとなへてはたすからざるなり」ところおしやつたと。この「ただとなへて」と、いま『歎異抄』で「ただ念仏して弥陀にたすれらまひらすべし」の「ただ念仏」とはぜんぜん違ふと曾我先生は言うのである。蓮如上人の「ただとなへては」というのは、ただ言葉だけで「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と、いわゆる世間で普通にただこう歌でも歌うように称えている念仏では助からないのだと。それでは仏とのコミュニニケーションにならないというのでしよう。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし」と言ったときには、衆生と仏との間にがつちりしたコミュニニケーションが成り立っているわけ

すね。つまり電話の譬えでいうならば、電話が通じているわけである。

ただ称えているというのは、ただ街頭を大きな声でどなって歩いているだけであるから、誰かに電話が届いているわけではない。勝手に歌でも歌うように唱えているだけである。これはこの現実のわれわれの日常生活にただ声が空中に飛んでいくだけであって、その電話が誰かに届きコミュニニケーションが成り立っているというわけではない。

ところが「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすれられまひらすべし」というときには、その「ただ念仏」はちゃんと仏と衆生とのあいだに電線があり電気が通っているわけである。その中の電線の中を通っている電気は何かというところ、それが本願なのでしようね。現実の本願という電気が伝わってきておる。そういう「ただ念仏」だという。

浄土宗では「一心一向」、非常に熱心に念仏を称える。念仏をずーっと称えていくとやがて無念無想になる。道場にも何もつて坐禅して一所懸命唱えれば、ある程度誰でも無念無想になれるかも知れませぬね。

一遍上人もこういふところをとおって悟りを開いたと

言われていますね。なにか悟りの歌があつたな、「となうれば、仏もわれもなかりけり、南無阿弥陀仏の声ばかりして」という。それを師匠のところへ持つて行って、「こういう境地が開けました」と言ったら「いや、まだ駄目だ」といつて突き返された。もう一度一所懸命に座り直した。そうすると「南無阿弥陀仏の声ばかりして」ではなく「となうれば、仏もわれもなかりけり、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とした。これを持つて行ったらよろしいと言われた。これは無念無想をさらに通り越した世界なのでしよう。

ところがここで言う「ただ念仏」は無念無想の念仏というのとも違う、これは曾我先生のご意見ですが。

いまの人には聞き馴れない言葉かも知れませんが、僕らの子供の時にはお寺へ行けばしょっちゅう聞かせられたのだが、ちつとも不思議に思わなかつた。「親さまの御恩をおもいだし・・・」と言う言葉。阿弥陀仏である親さまの御恩を思うということは、その裏ではもう「自力無効」ということがはつきり出ていますね。

なにか川にでも、崖から滑り落ちたときに誰かがひよつと救い上げてくれた。陸に上がって「ああ、ありがたしい」と思ったときには、その裏にあるのは自力無効でし

よう。自分は何の力もなしに、そのままだと川の底へ崖から落ちるところだったのを救われた。

ということとは、崖から落ちるといっただけの身の罪悪ですね。なにも特に泥棒をして追われたからというものではないのだ。しかし崖から落ちるといっただけの出来事自身が、その人自身にとっては身の罪悪でしょう。自力無効とこれを裏づけるものは具体的には身の罪悪である。身の罪悪を知らしていただくとは親さまの御恩を知らしていただくことである。知るのではない知らしていただく、どこまでも受け身である。

崖から落ちると覚悟して落ちるわけではない。ひとつ試してやろうといつて落ちるのではない。崖から落ちるなどとは夢にも思わないで生きているとたんに、どつと落ちそこを救ってもらつたのである。だから自力無効を知っているわけではない、むしろ平生自力を頼んでいるわけである。大丈夫だと思つて道を歩いていたところが思いがけずストーンと滑つたのである。

御恩を知らせていただく。いつも出る言葉ですが、善導大師は、それを「わが身はこれ罪悪生死の凡夫」とこうおっしゃっているのですね。曠劫よりこのかた、常に沈み、常に没し流転している。それはそういうことを覚

悟して、親さまの御恩を知るといふのではないのであつて、親さまの御恩を思わせられたときに、自分が罪悪生死の凡夫であるということを知らせていただく。これはいわゆる「機の深信」ですね。

ここで初めて宿業の自覚がおこる。機の深信は宿業をあらわす。落ちて救われたときに初めて宿業を知らされる。今まで大手を振って何十年間この世を歩いてきたが、いま思いがけなく川にストンと落ちた、そのときに自分の今日までいろいろな宿業積もり積もってきた宿業ということに思い当たる。つまり谷底にストンと落ちたということは、宿業の現れである。これも、ただ宿業を知るのではなく、宿業を知らしめていただく。誰からいただくかという親さまからである親があればこそである、それが機の深信である。

曾我先生はよつぽどこの「ただ」ということを強く深く考えておられるようですね。「ただ念仏」ということは、ちよつとやそつとの問題ではないのだと、「ただ念仏」と言えるところに機の深信がある。機の深信の中身は何かという宿業である。この宿業がぼつかり自分の中に姿を現してきた。それがいまの自分のこの現在なのである。現在ふうふう息を吐きながら毎日毎日あくせくと生き

ている、この実態そのものが宿業のあらわれなのである。

二、親鸞聖人は言葉の奥を

真つ直ぐに受け取っていく

曾我先生はおもしろいことを言っておられる。親鸞聖人は非常に言葉を上手に取り扱う人であり言葉の細工師だと、子供の時に思ったと言っておられますね。それで親鸞聖人はおもしろくなかったという。親鸞聖人はえらいと皆さんから勿体がられているけれども、言葉の細工師かどうかどうもおもしろくないなあ。子供のときは何歳の頃は知らないけれども、お寺ですから小僧さんの時代でしょうね、しよつちゅう説教を聴いていたのだから。親鸞聖人は、言葉を変に使うに持ち回って言葉の細工師だと思い、おもしろくなかったと書いておられる。ところが、大きくなってみるとそうではなかった。それはやっぱり子供心の間違ひなのであった。親鸞聖人は「親鸞にをきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よき人のおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。」と、法然上人のそう言われた言葉を、すなおに一途に真つすぐにああそうです

かとその通り受け取っておられる。細工師どころの話ではないという。

どこが細工師のように曾我先生には思えたかというところ、私なりに言えば細工師というのはこうなんでしょうね。一本の針金なら針金をこつちへ曲げたりあつちへ曲げたりするのが細工でしょうね。

なるほど親鸞聖人は書かれた文章を、親鸞聖人の解釈にはいつてしまふと曲げられてしまふと、だから細工師だと。表から平面的に読むと親鸞聖人の解釈はそう見えるのである。親鸞聖人は書かれた文章をその通りに真つすぐにああそうですかと受け取ったということは、僕から説明すれば、その内容を奥の方へ受け取った、奥の方へこう入り込んで受け取ったわけである。内容は平面的に見えているものではない、立体的にもつと奥の方へ意味がある、その奥の方を親鸞聖人は言っておられる。言葉を素直に受け取ると、その奥にこういうものがちやんとあると。これを取り出して親鸞聖人が解釈されるものだから、その平面の白いところだけを見ている人から言うと、なんだこれに書いてもいないことを勝手にこんなように言っているなあ、だから細工師だと。そうではない、むしろ逆にこれを素直に受け取れば受け取るほ

ど、この裏の奥の意味が出てくる。それが本物だと。

僕らはどこまでも書かれてあるそのままの平面的に見えると言いたいのだが、それは読む人の主観の作品だと。僕はこれをこの通り取ったのだと言いたいのだが、この通りというのはもう主観の作品だ、親鸞聖人はその主観をもたないから、書かれてあるそのままをすっかり飲み込んでしまふ。書かれてある言葉の持っている本来の意味、言葉を生かしている裏の意味、それを親鸞聖人はわかっている。これをなんとか言わずにおけないというので、それを外に出されるから、白の主観しか見ないというのを本物だと思っているから人から言うと、親鸞聖人は言葉の細工師のように見えると。曾我先生の言うのはこういう意味だと思うのですね。

それがなぜいまこの文章と関係があるかというところ、ただ念仏と世間でいうのは外の白い意味だけをとっている。親鸞聖人はただ念仏というものを、その奥の意味を、奥の本当のただ念仏という気持を、これを取り出して言っておられる。これほど素直な取り方はないのだと。これは本当に主観を入れないでこの通りとっておられる。

その例として、曾我先生があげておられるのは、さきに善導大師のお言葉（『観経疏』玄義分）ですが、ちよつ

と読んでみますと、

然るに娑婆の化主、

お釈迦さんですね。

其の請に因るが故に、即ち廣く浄土の要門を開き、

浄土に入るための、ぜひ通らなければならぬ道を開き、これは浄土教をお釈迦さんが開かれたという意味なのでしょね。

安樂の能人、

「安樂の能人」というのは、安樂国は極樂ですから、極樂におられる達人というのでしょうか、偉い人、極樂のご主人、つまり阿弥陀様が、

別意の弘願を顕彰す、

特別に衆生のために選んだ弘願、弘願というのは第十八願、それを顕されたこと。

其の要門とは、即ち此の『観経』の定善二門これなり。

『観無量寿経』には、ずーっといろいろの、極樂に行く、浄土往生するその準備を書いている。

初めの方には、観念の方が出ていますね。韋提希夫人に、第一、第二、第三、第四、第五というように、ずつといろいろな観想をする、仏の浄土のすがたを見る。そういう観念の世界、定に入った世界をお釈迦さんが説いている。

それから後半分の方に、とてもそういう定はできないが、いろいろな道徳的に善をする方をお釈迦さんが説いている。いろいろの善いことをする、これは散善である。そういう二つの門を『観経』には書いてある。

これは要門である。ぜひ通らなければならぬ門なの

だが、しかしこれが最後の門ではないのだと。こういう二つの門を方便として通らして、往生を求めさせる。方便としてという意味は、それなら方便ではない本当の目的は何かというと、第十八願の弘願である。

「弘願」というのは『大経』の説の如し、

これは『大無量寿経』の方に書かれてあるあの法蔵菩薩の四十八願の、あの立場ですね。この弘願に入って

一切善悪の凡夫、生を得るものは、皆

これは善人悪人を問わず、貧富老少を問わず、およそ生きとし生きるものはことごとく皆

阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁と為さざるはなし。

これを一番強い縁とするのである。いろいろな縁があ

るだろうが、そのうち一番強い増上縁である、仏の力と
いうのは。そういう善導大師の本文が書いてありますが、
そのなかの要門として、定散二門

定は即ち息慮凝心、散は即ち廃悪修善これなり。

(以上『観経疏』玄義分)

「これなり」と、善導大師は定義をくださった。定とは何ぞや、散とは何ぞや。この二つのことが『観無量寿経』に要門として、極楽への救いに入る前提としてこの二つの門を書いてある。その次にここを通って最後の弘願に入るのだと、こういうようにすーっと平面的に書いてある。

「散は即ち廃悪修善」ところ善導大師は定義をあげただけだから、その後はすーっと表通りを読んでいくのは普通なのだ。曾我先生もここを読んでいてそういうことを思わなかった、気がつかなかったと書いてある。ところが親鸞聖人は「定は即ち息慮凝心、散は即ち廃悪修善」ところ書かれた二つの言葉の裏をさっと見抜いて、それをはっと受け取っておられると曾我先生も言っておられ

る。

「定心修しがたし、息慮凝心の故に。散善行じがたし、

廃悪修善の故に」

（『教行信証』化身土巻）

善導大師が「散は即ち廃悪修善」と定義されたのを、その気持を親鸞聖人がはつと受け取って「散善行じがたし、廃悪修善の故に」とこう書き直されたという。曾我先生の書いておられることによると、地下の善導大師も舌を巻いて驚いておられるだろうと。後世おそるべき人間だと善導大師はたまげているだろうと、これはとても他人事ではできない受け取り方だと、こういうように曾我先生も書いておられます。曾我先生のお気持は何かももっとも深く取りようがあるのではなかるうかと思うが、僕はその辺ぐらいしかよう言わないのだけでも。

つまりこういう気持の前提には、さつき申しましたよ

うに「ただ念仏して」と言われたときに、ただ念仏という中にこちらと仏との間に、すっかりこの本願という電氣を通してコミュニケーションがもうびったり成り立っているということなのでしょうね。

だから「定善は即ち息慮凝心」と聞いたときに、ああそうか定善修しがたし息慮凝心のゆえにと、「散善は即ち廃悪修善」と言われたときに、ああそうでした、散善行じがたし廃悪修善のゆえにと、だからわれわれ凡夫は弘願に救われざるを得ないのですと真っすぐにそこについてしまうのだね。これがこのただ念仏してということの中身だと、こういうのでしょうか。

どうですかね、なにかそのところをもっと別の読み方があるかな。あんまり力瘤を入れておられてね、ここの子供の時に、親鸞聖人はえらい言葉の細工師だおもしろくないなあと曾我小僧さんが思った。その反動がきているということになる。すっかり聖人にしてやられたというふうな。

つまり親鸞聖人の受け取り方は、お経ならお経の言葉を、あるがままにお聖教の文字をいただく。そこにお聖教のおことばが輝いてくると。つまりことばの端的な意味、言葉の生命、意義をつかんでおられる。

三、生きているわれわれの根源のないのちの世界と宿業という否定を通して感応道交する

おそらくこれがいつもあちこちで口癖のように言われる「感応道交」ではないでしょうか。われわれ自身の根源のないのちの感応道交。

生きているわれわれの根源のないのちの世界との感応道交ということは、この頃新聞や雑誌でいろいろ皆そういうようなことを言われておりますね。

そういう意味ではよほど宗教的な気分が、ずっと社会一般に広まり深まってきた、そういう傾向が濃厚になってきたことは確かに思える。そのことはおそらくそれと正反対な退廃的な末世的ないろいろな現象の広がりとは無関係ではないでしょう。つまり一方でいのちの根源を忘れ、末梢的な前へ前へとだけあせって走って行こうとするいのちの傾向がありますね。そういう社会の傾向の反面、あるいは社会がそういうものであればあるほど、ある意味で自分の故郷、いのちの故郷、いのちの本源の方へ心ひかれるということも確かに事実でしょう。

いのちの根源の世界と現実のわれわれとの間の感応道

交の気分があるということは、これは結構なことだと思うのです。しかしそれだけでは一種のいのちのノスタルジアみたいなものでないのかな。それだけでは宗教にならない。

つまり根源のないのちの世界とのコミュニケーションが直結するそれでよいのではないかとこう言ってしまったのでは、感応道交を裏づける支えるもの、先の「否定」がないと言いますか、一番初めに書きました自力無効、身の罪悪感、宿業感がないね。

感応道交の気分は出ているけれども、宿業感を欠いていっている。何か新聞や雑誌で気づくことはありませんか、そこにどうも宿業感はないね。

いまでもそういう問題が出てきているのではないかな。自分のいのちの根源と直結する、根源の方に帰るということは非常に喜ばしい現象なのだが、宿業感を裏に持たないということは、いのちの根源と直結してしまつて自己の否定がないわけだな。向こうとこちらが否定を通して結ばれるならわかるのだが、否定がなくて肯定のまま直結しているものだから、結局甘くなってしまう。

その結果は、向こうの本当の親心を聞かないで、子供だけで勝手に親心を決めてしまう。素直に親心を受け止

めるのではなしに、親心というものを子供の力で拵えてしまう。こっちの方で親心をつくって、親心はこうだからこうしなければならぬとこういつてしまう。親心が宙に浮いてしまつてどこにあるかわからない。

電話のコミュニケーションにたとえればどうなるのかな。私は電気のこととはよくわからないが、電気の抵抗ということはどういうことかな。つまり弥陀と衆生との間にコミュニケーションができる。電話が直結する、それは非常によいことだ。直結する電話の中を通つてくる電気というものは、それが本願である。電気を通るのは電線の中の抵抗を打ち破つて来るのではないかしら、そういうことが言えるかな。電気は上から水が流れるようにサーツと落ちて来るのではないんで、そこに抵抗があるから、抵抗を逆に縁として電気がこつちへ流れて来る。それがつまり電線なのである。電線は電気を通するのだが、一方から言えば抵抗なのではないかな。電気が通るときに、電線自身が抵抗となり、電線自身が自分の生命を知る、そこでのちのちの根源を知らされる。電気が通らなければ宿命はわからない。宿命感は湧かない。電気に対する抵抗それが宿業感である、そう言つたらどうでしょう。

感応道交というけれども、いつもそういう否定を通した感応道交、つまり宿業という否定を通した感応道交である。宿業が真ん中にあるって媒介する、それで向こうとこつちとの間の感応道交ができる、そういうことだろうと思ふのですね。それをもう少しうまく言えないものかな。

これもいつも出る例ですけれども、願成就の文。これは『大経』の下巻のはじめにある言葉です。至心回向願生彼国 即得往生 住不退転「これをこの通り外側からすーっと読んでいけば、われわれ衆生が、「至心に回向して」、仏の方に回向して、「彼の国に生まれんと願う」、往生したいものだとお願ひする。いろいろの散善とか定善とかいう、いろいろの徳を向こうへ回向してそれでどうか往生させてくださいと願う。願えば「即得往生」、すぐその場で往生することができて、一生後戻りしない、往生する前向きの生涯をおくることができる。……」

(テープ中断)

われわれ今まで、なんべん後戻りしよう、後戻りしようということにぶつかつたか知れないのだね。その度にいろいろ縁があつて、周囲から助けられたり、前の方

から引つ張られたり、そのおかげでやつとまあ、前向きと言えばえらいおこがましいが、それでもともかく前へ前へと進んできた。

ところが、本願に乗ずれば、もうその本願の力でいやおうなしに、後ろに後戻りしない。明日はもう外へ出るのは嫌だなあ、家に引つ込んでいようかなと思うことが何度もあったわけけれども、そういうことはなくなる。毎朝毎朝元氣よく往生の道の前へ前へと進んでいく。

そういうように願生彼国、即得往生ができるのは、「至心に回向したまえり」と。この「至心回向」はこっちが至心に回向するのではない、仏さまがわれわれの方に至心回向してくださった。仏さまの力をこっちへワーツと送ってくださった。あの国へ行きたいと思っっているものを、そのままそっくり救いとつてくれた。それは仏の至心回向なのだ。至心回向は「至心回向したまえり」とこのように親鸞聖人は読まれた。

これは親鸞聖人が細工したのではない。曾我小僧は親鸞聖人を細工師だと思っただが、それとは違うのであって、素直にこの文章を読んでいけばおのずからそういう気持ちがさつとこちらへ出てくるという。つまり感応する。感応道交で、「至心回向 願生彼国 即得往生 住不退転」

こう一生懸命読ませてもらっていると、いつの間にか至心に回向したまえりという気持ちがこちらへグーツと出てくる。そういう気持をそのまま言葉に表して、「至心に回向したまえり」と親鸞聖人はこう読まれた。これほど素直な読み方はないのだと、こういうわけなのである。

つまり、文字を文字として分別したらいかん。分別は主観である。この字を分別して読むとこれは至心回向であるこれは願生彼国であるとこう読むから主観的な言葉になってしまう。言葉を、文字を、主観的にみるのではなしに、言葉を直接に聞くのだと、そうすると思慮分別が消えておのずから頭が下がる。文字を見ないで文字を聞けという。

それが「聞其名号」である、その名号を聞く。名号を聞くのである、南無阿弥陀仏は、何かと分別するのではない、南無阿弥陀仏という名号を聞くのである。これは生きた言葉である、仏の声なのである。これが第一義である。

南無阿弥陀仏というそのいわれは本願、第十八願である。本願はいわれであり説明である。これは第二義である。本願がさきにあるわけではない、南無阿弥陀仏がさきにある。だからそれをただ聞けばよい。説明を聞いて

から向こうの声を聞くわけではない。

それはまあそうですね。道で会って「おはよう」と言ってから「今日はいいお天気ですね」と言うのであって、「今日はいいお天気になりましたな」、「おはよう」とは言わないですね。「おはよう」というのはお互いにコミュニケーション、「おはよう」と言ったその言葉の中に、今日はいい天気ですなすっかりやりましょうという意味が含まれている。

いわれが第十八願である。「今日はいい天気です、だからおはよう」とは言わない。「おはよう」という声をお互いに聞き合う、聞いてそのいわれが本願である。その聞き合い、それが感応道交である。

この前の本誓寺でのお話ですが、広瀬杲さんがこういうことを言っておられましたね。

誰かが曾我先生に、「感応道交感応道交とよく言われますが、さっぱりわかりわかりませんがどういことですか」と聞いたたら、とっさに「とった手綱に血が通う」とパッと答えられたと。

この歌はご存じでしょうみなさん覚えがあるでしょう。これが感応道交だと、感応道交とはそういうことだと。馬と人との、「とった手綱に血が通う」ということなので

しよう。

親と子は血が通っているというのなら歌にはならないね。「親と子の間に血が通う」などと言ってみても、そんな当たり前のことは歌にも何にもならない。つまり否定がないでしょうそこには。普通ならば畜生であり人であるだから全然通うはずのないものが、ああいう戦場という背景で特殊な関係に入っていく。つまりどちらも次の瞬間には命を失うかという否定の極限までいっているときに、そういう否定を通して不思議に通うはずのない血が通う。

しかも、「とった手綱」だからおもしろいね。コミュニケーションが「手綱」であって、電話なら電線だけでもここでは手綱である。ただの物であるはずの手綱ただの物質であるはずの手綱に生きた血が通っている。馬と人と一つになるはずがないものが一つになる、それが感応道交である。そういう世界ではいちいち説明は要らないので、もう馬がヒヒーンと鳴けばこっちにそれでちゃんとわかる。主人が「ホーラ、ホーラ」と言えば、馬の方はちゃんと主人の気持がわかる。つまり馬も人も共にそこで聞其名号の世界に入っているわけである、分別ではない。

こういう血が通ったところに、お互いの馬と人とここにこういう戦場に一緒に来ているということに、しみじみと因縁を感じる。馬が人だか人が馬だか、こっちがあつちだかあつちがこつちだか、ともに今日ここへ来なければならなかった因縁、つまり宿業をともし一つに感じる、そういう世界があるのでしょね。

四、感応道交、それが

善知識にあったという意味である

なんでこう回りくどくいろいろなことをこのように繰り返し繰り返し言ってきたかというのと、これが、「ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし」と法然上人がおっしゃったその言葉を聞きさえすればよい、つまり聞其名号という意味である。よき人のおっしゃったこと以外何も子細はない、完全に他に何もないので、その受け取ったものの中に一切のものがあるからあとは何も要らないのであるそれだけでもう一杯なのだ。それがつまり善知識にあったという意味である。善知識に遇ったという意味はそこなのである。

今の学校では言葉を聞くということの反対が、言葉を

聞かないで文字をノートに写すことである、と曾我先生が言っておる。さっぱり先生の言葉を聞こうとしないで一所懸命それをノートに写す。だから先生と生徒の間に感応道交、ちつとも血が通うということがない。ノートに写したのでは上に先生がいて下の生徒がある。その間にいわばノートと紙がある。これでは馬の手綱にならないわけですね。

法を念ずるということが、師を念ずること弟子を念ずることである。この感応道交の世界では、お互いが若い心にかえる、年寄らんと曾我先生は言っておられる。実感なのでしょね。ノートだけの世界では血が通うことがないから、師匠は年齢を重るほどだんだんいわゆる年をとっていくだろうし生徒の方もますます疲れるだけである、ところが法を念ずる世界では師は弟子を念じ弟子は師を念ずる、若い血が通い合うから、年寄らないのだつまり疲れることはないのだと。

曾我先生の講演旅行中、ある学生が朝から晩までついてまわった。議論をしたり質問なんかしたりして。日本海側の方から京都の方に横断して帰ってきたときの途中だっかな、京都の宿について風呂に入ってもらおうとしたが、まだ二人はその話を続けてやっておられた。学生

が放さない先生も熱心に話し続ける。お付きの方が見るに見かねて、もういい加減にやめたらいいではないかと、先生はお疲れでしょうからと、それとなしに風呂に入ってくれということをやったところが「いや、疲れはせぬ、疲れるのは神経だけで、私は疲れはせぬ」とこう言われた。ここで去年あたりもこの話はでたでしょう。だけどその意味はもう一つよくわからなかった。それがこの頃、こういうことだと思ふのだな。

とった手綱に血が通うのと同じように、大地に人間が立っていて馬もそこにいる。人と馬の間に血が通うこの血はどこからきているかというと、大地の根源のないのちから来ている。考えてみるとそれはそうですね。野菜にしる海の魚にしるみな、空気はもとより、そのいのちはどこにあるのかというと、いのちは大地の根源のないのちにいっぱいあるのである。このいのちがたまたま人間の身体の中を何らかのかたちで通って、馬の中を通過して、それでいまたまたこの手綱を持ちあつたところに通ったのである。人のいのちは五十年か八十年かの形にすぎないのだが、五十年八十年の形がなくなつたからといって、いのちがなくなるわけではない、大地にあるいのちは相変わらず朝昼動いているはずなのである。そう

いう始めもない終わりもない無始無終の根源のいのちの上に、たまたま身体がのっているだけのことである。いのちそのものは疲れることはない。曾我先生はそのようなことをおっしゃつたのではないかと思うのだが、どうだろうか。

いのちは疲れることはないのだと、疲れるというのは神経の話である。たまたま人間には神経の形があるものだから、この神経だけが形の都合上疲れるという一つの現象を生ずるだけであつて、いのちの本体そのものは全然疲れることはない。朝から晩までしゃべっているのもそれがいのちなのだ。いのち自身がしゃべっているのである。そのいのちそのものがエネルギーなのだ。朝から晩までというのは人間の立場から見ただけのことで、いのちそのものからいえば、始めもなければ終わりもない永遠のいのちなのである。流れているいのちなのである、だから疲れることはないのだと。そういう意味だと思ふのだがどうだろう。

皆さんは若く身体がしっかりしているから、外と身体とは別のもののように思つて歩いていてはしょうが、年をとつてくると、ほとんどその外と身体との区別がもうない。こちらが弱つてくるからだろう。おれが動いてい

るのだから空気が動いているのかわからない。風が吹いてくると風に吹き飛ばされるなどというよりも、こっちも一緒に風になって、風と一緒に動いている、そんな気になっていく。別のようない感じがしなくなる。それでほんと気がついてみると、僕の中をいのちが通っているだけのことなのである。俺はちよつといのちに腰掛けている。

だから僕がどんなにしゃべっていても、いのちが勝手にしゃべっているのだから、おれは疲れはせん。疲れるとすれば、いのちと身体の接点である、いわゆる神経、神経が疲れるといふべきものであって、だから「わしは疲れはせんよ」と曾我先生はこういわれたという。

どうですか疲れないう説明は。いちおうそれでわかるのではないかな。曾我先生が実際にはどんなお気持ちで言われたのかは知れないのだが。

曾我先生の本をちよつとしか読んでいないのだが、たまたま疲れないうことを他でも言われたということが出ていましたね。この「とつた手綱に血が通う」、これもどっかに書いてあったなそういえば。今度広瀬先生が来て言われてハツと思った。

五、親鸞聖人の一生は

念仏と宿業との手綱のつなぎである

今日のところは、題八講「六、念仏即生活」というところでしたね。

「念仏して」というのが聖人の全生涯であった、これ以外は何もなかった、と曾我先生は言う。つまり念仏は即憶念、声を出すだけが念仏ではないので、憶念も念仏である。仏を思う、行住坐臥、法然上人と・・・・・一緒だと。

「念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よき人のおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。」それだけだ。寝ても覚めても、南無阿弥陀仏というところに法然上人がおられる。よき人を離れない、念仏を称えるたびによき人はそこにおられ離れない。

何か甘ったれた様子にみえるけれども、念仏の中に親鸞聖人自身の、あるいはわれわれ一人一人の、善悪は宿業と知らされる。

知らされるといふことは、分かったといふことではないのであって、知らされて知るところに、悪は自然法爾に自然に善になり、有漏の善は転じて無漏の善になる。

つまり現実の善は無為の自然の法の善になる。

それが親鸞聖人の一生である。どこまでも念仏と宿業との手綱のつなぎである。それが「念仏して・・・」ということだと、曾我先生は非常にそこに力こぶを入れておられるように見える。

もう一つだけ先に進みましょうか。

六、「ただ念仏」の一行一心は

仏教の旗印である

第九講 「一、表現の単純性」

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまひらすべしと

ただ称える、「唯称弥陀」である。一心一向、一向専修。つまり、機のはからいを捨てて一心に念仏。

この「ただ念仏して・・・」と言う言葉は、たぶんあの鎌倉時代の時代思想に依じての言葉ではないかと思うのだと曾我先生は断っておられます。というのは鎌倉時代の聖道門には題目はなかったという。そういえば日蓮上人のお題目は、親鸞聖人よりも後からでしたね。題目がなかった、つまり仏教の旗印というものがなかった。

仏教仏教とある意味で非常に盛んだった聖道門、いろいろな宗旨があったけれども、誰が聞いてもすぐわかる、ああそうかと思うような、簡単明瞭な題目がなかった。それを裏では考えての、一つはつきりしたこれ以上簡単なもののないような単刀直入の「ただ念仏して」という言葉を出されたのではないだろうか、とこういうように曾我先生は言っておられますね。

それが法然上人の選択本願である。難しい聖道の理論とか修行だとか観念だとかそういうものをやかましく掲げるのではなしに、ただ念仏それだけでいい。その選択本願の信心の本にする信心為本これが親鸞聖人。一行一心。ただ念仏という一行一心。そういう意味があったのではなからうかと、こう言っております。このことが現在われわれの社会でも、大きな意味があるのではないだろうか。その結果が明治以来、『歎異抄』という一本にこれほど注釈本や解釈本が出たものがないと言われるほど賑やかになった原因ではないだろうか。『歎異抄』が掲げているのは「ただ念仏」。非常に複雑な西洋思想が入ってきて混乱してしまった明治の日本の思想界に「ただ念仏」これだけを掲げた。それがつまり時代に応じたものではないかと、曾我先生は言っておりますが。

さて明治から大正、昭和までいろいろあったにしても、終戦後の現在としては、これはどういうふうにかされるべきものか。これはわれわれ自身の問題なのでしょいか。

その次はお手元にお渡ししたプリントを読ませていただきます。